

# 世界で一番パパが好き!

2005(平成17)年2月1日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★★



監督・脚本=ケヴィン・スミス/出演=ベン・アフレック/ラクエル・カストロ/リヴ・タイラー/ジョージ・カーリン/ジェニファー・ロペス (東芝エンタテインメント配給/2004年アメリカ映画/101分)

……娘の誕生と引き換えになった最愛の妻の死……。音楽業界の宣伝マンとして自信満々の仕事をこなしていた主人公はそんな現実をどう受け入れたいのだろうか……。？ シングルパパの奮闘記とその人間的成長を7歳になった娘との物語を通して描く、心暖まる好作品。これが俺だったら、サテどうしていることだろう……。？

## 前途洋々の人生だったが……

主人公オリー・トリンキ (ベン・アフレック) は音楽業界の宣伝マン。といってもかなりリッチな生活。それは、たくさんの有名なミュージシャンの宣伝を担当し、多くの部下を使って日夜忙しく働いているからだ。そんなオリーが最愛の妻ガートルード・ステイニー (ジェニファー・ロペス) と一緒に住むのはニューヨークのマンハッタンにある豪華なアパート。毎日朝早くから夜遅くまで働いていたオリーだったが、当然励むことは励んでいたとみえて (?)、妻のお腹の中には赤ちゃんが……。

オリーの人生は前途洋々そして夫婦生活も子供を含めた家族の生活も、人生バラ色、万々歳という状況のもとで出産の日を迎えたが……？

## 娘の出産と引き換えに……？

アメリカが「女性上位」の社会であることはこの映画を観ているとよくわかる。忙しい業界に身を置き、1分を争うスケジュールの中で神経をつかって仕事に精

を出しているオリーだが、妊娠中のガートルードにも気をつかわなければダメ、さらにラマーズ法による出産にも立ち会わなければダメ、ということで、アメリカの男はホントにツライ……？ 私には出産に立ち会うなんてとてもとても……？

ガートルードの出産は意外にも難産だった。オリーが立ち会う中赤ちゃんは無事に誕生したものの、ガートルードはイキんだことが原因で動脈瘤が破裂し、手当ての甲斐なく死亡。オリーは悲嘆に暮れることに……。オリーを少しでも支えることができる家族はニュージャージー州のハイランズに住む父親のバート・トリンキ（ジョージ・カーリン）しかいなかった。

## 世紀の大失敗とは？

娘の誕生と引き換えに起こった妻の死亡という現実を忘れようと、オリーは仕事に没頭した。その迫力はものすごいもの。しかし他方、そのために娘の世話をさせられている（？）父親のバートはたまったものではない。「お前の娘だぞ！」と言っても、「今日は、何時に、何の予定がある」と仕事を優先し、結果的に娘の世話をバートに押しつけるオリー。

もっとも、子育てに男2人が苦勞している姿を見ていると、なぜオリーは最低限の家事と乳飲み子の面倒をみてもらうため、家政婦やベビーシッターを雇わないのだろうかと思ってしまう。しかしそうすると、赤ん坊の世話の押しつけあいをめぐる父と祖父との葛藤というテーマがボケてしまうから、映画のストーリー構成のテクニクとしてはやむをえない……？

しかしある日、バートは遂にキレてしまい、孫の世話を放棄。仕方なくオリーはウィル・スミスの記者会見のイベントに赤ちゃんを連れて出かけたが、途中で泣き出すワ、おしめの交換をしなきゃならないワでてんやわんや……。人間、イライラしながら仕事しているとロクなことはない！ これは誰もが痛感することだし、そのために失敗した経験を誰もがもっているはず。したがって、そうならないように環境をいかに整備し、気分をいかにコントロールするかが仕事人間としての能力であることは明らか。

そしてオリーはもともとそんな能力を十分に備えていたはずだが、この時だけ

はすべてが悪い方向に結集してしまった。その結果、このシングルパパは天下の大俳優ウィル・スミスを罵倒し、さらに会場いっぱいの記者たちも罵倒してしまったから、さあ大変……！

## 大学院生の男性観とセックス観は？

「世界一のパパになる」と誓ったオリーは、妻の死亡後娘が7歳に成長するまで女性関係は全くなかったのか、また誰ともセックスしていなかったのか、こんな露骨な質問を直接ぶつけてきたのは、ビデオ店でバイトをしている大学院生のマヤ。マヤはセックスとビデオについての論文を書いているため、一人モノの男性の生態（性態？）について学問的興味（？）をもち、その取材（？）のためランチにオリーを誘ったというわけだ。

そんなマヤに対するオリーの答えはマヤにとってかなり意外な内容だったが、そこから始まった2人の交際は……？

## またまた天才子役の出現！

昔、日本での最高の子役は、「同情するなら金をくれ！」のセリフが今でも耳に残る安達祐実だったように、現在ハリウッド最高の子役は、ダコタ・ファニング。『アイ・アム・サム (I am Sam)』(01年)、『コール』(02年)をはじめとして、つい最近の『マイ・ボディガード』(04年)でもすばらしい演技を披露していた子役のチャンピオンだ。

しかしアメリカそしてハリウッドは広い。子役はこのダコタ・ファニングだけではないぞ、とばかりに登場したのが全米オーディションで選ばれた新たな天才子役のラクエル・カストロ。彼女は1994年生まれだが映画の中では7歳のガーティを演じている。ガーティの「交渉能力」とそのセンスの良さ(?)は7歳とはいえ天才的……？

父親のオリーとビデオ店でバイトをしているマヤとの「あわや……」というところを目撃(?)したガーティは、2人を「お説教」する中で、まずマヤに対しては「好きなビデオをタダにせよ」との要求をオーケーさせ、続いてオリーに対しては、学芸会でガーティが好きなミュージカルを演ずることをオーケーさせる

という、一流弁護士顔負けの交渉術を披露している。

しかしそうはいつでも、まだまだ子供。父親が再び宣伝マンとしての仕事に熱意を燃やしてニューヨークに戻ると宣言するとハデな父娘ゲンカになってしまうことに。これではオリーの気苦労は絶えることがない……？

しかし最後は何とも言えないハッピーエンド！ もっとも、私がオリーの立場であればそのようにした（できた）かどうかは別問題だが……？ 今をときめくハリウッドの大スター、ベン・アフレックを相手に堂々の演技を展開するこのラクエル・カストロには今後も注目だ！

## この映画の理解のために必要な基礎知識 その1

ガーティが最初に学芸会で歌いたいと言ったのはミュージカルの『キャッツ』。そしてブロードウェイで観たいとオリーにねだったのもこの『キャッツ』。しかし業界人であるオリーは『キャッツ』はお気に入りではない様子で、ガーティのおねだりを却下。そのかわりにブロードウェイでオリーとガーティが観たのは『スウィーニー・トッド』というミュージカルだが、これはかなり変わったブラック作品……？

ところがなぜかガーティはこのミュージカルを観て気に入り、これを学芸会でやると言い出した。学芸会での子供たちの人気はやはりミュージカル『キャッツ』のスローバラードの名曲『メモリー』。これを歌う子供たちやその親たちが圧倒的に多かったから、そんな中でのガーティの出し物はきわめて異質のもの。さてその反響は……？ そしてこの出し物にオリーは無事(?)出演できたのだろうか……？

## この映画の理解のために必要な基礎知識 その2

この映画でオリーの生き方に決定的な影響を与えたのは現実のハリウッドの大スターであるウィル・スミス。彼が主演した『アイ,ロボット』(04年)は大ヒットした面白い作品だったが、この映画で意味を持つのはそういうことではなく、ある偶然によって2人が隣り合わせに座ることになった際、オリーがこの大スターから映画の仕事よりも妻や3人の子供たちのことを大切に思っていると聞かさ

れたこと。

これだけの大スターのこれだけの地位や名声に比べれば、自分がニューヨークでやりたいと思っている仕事の価値などちっぽけなもの。そしてまた、ガーティと2人で暮らす幸せな人生と比べれば……？

こういうストーリーを理解するためには『アイ, ロボット』やその主演俳優であるウィル・スミスの人物像をある程度基礎知識として理解していることが必要だ。

## 人それぞれのターニング・ポイント

私が2000年7月に出版した『実況中継 まちづくりの法と政策』は、1999年11月12日～15日に愛媛大学法文学部で実施した「都市法政策」の集中講義を「実況中継」した書物。

その2日目の朝一番の授業のネタが前日の晩テレビで観た『ターニング・ポイント』という番組だった。すなわちここでは①浜崎あゆみのケース、②落合博満のケース、③キャンディストリップターのケースをそれぞれ紹介したうえで、私のターニング・ポイントとなったのが都市問題にめぐり合ったことであると講義した（同書84～88頁参照）。

オリーの人生を大きく変えたのは、第1に妻のガートルードの死亡、そして第2にイベント会場での大失敗だが、これは自分の意思によるものではなく、外部的要因やミスによるもの。この映画のなかでオリーにとっての最大のターニング・ポイントになったのは、ウィル・スミスとの数分の語り合いの中で自分の価値観を転換したこと、より正確に言えば、価値観の転換を「自己確認」できたことだ。

この決断によって、以降オリーはニューヨークでの宣伝マンとしての華やかな生活と社会的成功から離れ、ニュージャージー州ハイランズでのガーティとの静かな生活を再び始めることになった。もちろんこの映画では、その選択が正しいものだと主張しているわけではない。さて、あなたはこのオリーの選択をどう評価するだろうか……？

## ベン・アフレックの「熱演」に拍手！

この面白いテーマの映画で、シングルパパとしての奮闘ぶりや成長ぶりを「熱演」するのは、あの『パール・ハーバー』（01年）で大ブレイクし、今やハリウッドの大スターに成長したベン・アフレック。背が高くハンサムで、男性的魅力タップリの彼は、その特徴を生かして大作の主演を務めるべき器だが、この映画ではどこにでもいるような身の丈スケールのシングルパパに扮している。しかし私には、やはり少し似合わない雰囲気も……？

音楽業界の有能な宣伝マンだから口が達者なのは当然。したがってニュージャージー州のハイランズに引きこもり、道路清掃の仕事に就いていた時も、水道工事のため3日間道路を封鎖することに対して反対集会を開いた住民たちを口八丁手八丁で説得したのはオリー。この説得シーンはボヤかされているものの、その熱演の様子は雰囲気だけで十分にわかる。

オリーの早口での熱弁ぶりは、妻のガートルードに対しても、父親のパートに対しても、そして7歳に成長した娘のガティに対しても同じ。あれだけいつも一生懸命にしゃべっていたら疲れるのでは、と思うほどいつも熱弁をふるっているが、あの大柄のベン・アフレックがそれをやると一層目立ち、多少耳ざわりの感も……？

もっともこの「動」の部分に対する「静」の部分も彼は見事に演じている。その「静」の部分とは、1人になって考えている時の姿。そしてそのハイライトは、自分の生き方を決定づけることになる本物のウィル・スミスとの会話シーン。意外に身近なところに自己の生き方を決定づけるターニング・ポイントがあるものだということがよくわかる。こんな「お茶の間スター」としての役柄もうまく演じることができるベン・アフレックに拍手したい。

ちなみに、彼の親友であり、『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』（97年）でともにアカデミー賞とゴールデン・グローブ賞の脚本賞を受賞したマット・デイモンがチョイ役で友情出演しているのでお見逃しなく……。

2005(平成17)年2月2日記